

第2節 初任者研修段階における体育授業の心配に関する事例研究

木原成一郎

I 研究の目的

教員養成審議会の第3次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」（平成11年12月10日）は「養成・採用・研修の改善を図るための具体策を策定・実施する取組を通じて一層連携を深める方策を都道府県段階等で検討することが必要」と述べている。しかし、具体策を作成するためには、教職への準備である教員養成段階や教職に入っていく初任者研修段階で、教師として仕事を行うために教師がどのような援助を必要としているのかという実態を把握することが不可欠である。ここでは、この実態を把握するために、Behets D. (1990)や Hardy C.(1996)、木原成一郎他（2002, 2003）が用いた研究方略、つまり教師が心配に感じている事項の把握を通して教師が成長するために必要としている援助を明確にする研究方略を用いた。

本研究の目的は、新任採用後1年間の初任者研修期間において教師が体育授業に関して心配に思っていることを明らかにし、初任者が必要としている援助を指摘することである。教師があることを心配に思うとすれば、そこには彼らの解決すべき課題が含まれていると思われる。初任者の体育授業に関する指導力を向上させるためには、こうした初任者の心配がどこにあるのかをふまえた上で、初任者の求めている課題への援助をプログラムに位置づける必要があると思われる^{注1)}。

II 研究の方法

1. 対象

本研究は、H大学教員養成学部を卒業し2002年度と2003年度に採用された新任教師7名を対象とした事例研究である。初任者が抱える成長課題は、着任した学校の地域や同僚教師によって多様であることが予想される。そこで、対象に共通な一般性よりも対象の多様な特質を把握するに適した事例研究をもちいた。

事例研究の場合、研究の対象となる事例の抽出は、ネルソン.T (1999, p.388.)によれば、「研究の当事者がもっともよく調べることができる対象を選ぶ」のであり、「研究者が研究に含まれるべき基準を設けて、これに当てはまる標本を探し出す」とされている。本研究では事例の抱えている心配をありのままに調べることができるように、すでにラポールが形成できている卒業生を対象として選んだ。

対象者の7名は小学校課程保健体育領域卒業(5名)と中学校課程保健体育専攻卒業(2名)からなり、1名が高等学校保健体育教師、6名が小学校教師として採用された。なおこの7名のうち学部卒業者はすべて、小学校教諭1種免許と中・高等学校教諭1種免許を取得した。また、大学院修了者のGは小学校教諭1種免許と中・高等学校教諭専修免許を取得した。7名の勤務地は中国、四国、近畿、関東と国内各地に広がっている。

2. 資料の収集と分析の方法

(1) 質問紙調査

浅田匡(1993)で用いられた「授業日誌」を参考に、「学校と体育の授業の心配に関する日

誌」を作成し、毎週その週にあった心配を振り返って自由に記入するよう依頼し、学期毎に郵送の返送もしくはインタビューの際に持参するよう依頼し回収した。記入は「学校でおこったことすべて」と「体育の授業を教えること」のそれぞれについて「心配に思ったことを書いてください」と依頼した。回収した1学期分の日誌を、3名（大学教官1名、小学校現職教員<在職14年>1名、大学院生1名）でKJ法（川喜田二郎,1967）を用いて分類し、表1と図1のように整理した。

（2）インタビュー

2002年度に2名（のべ3回）、2003年度に4名（のべ4回）、2004年度に1名（のべ1回）の対象者に半構造化したインタビューを各1時間から2時間実施した。インタビューはすべて筆者と対象者が1対1で行った。インタビューの場所は表1のように対象者の勤務校、大学研究室、対象者の下宿、喫茶店等である。インタビューはすべて文字化しトランスクリプトを作成した。さらに、1学期の心配事項について質問紙調査とインタビューの双方を実施することができた2名を選定し、その2名の「学校に関する心配」と「体育の授業に関する心配」について、質問紙調査で得られた項目ごとにトランスクリプトの該当箇所を項目順に抽出して記述した。またインタビューの解釈部分をこの2名に提示して解釈に同意を得た。

III 結果

表1によれば、「体育の授業に関する心配」は「授業」と「行事」と「保護者からのクレーム」の3つの大項目に分類された。第1の大項目「授業」は合計30個と最も数が多く、「指導計画」「授業前の準備」「子どもの訴え」「授業中の子どもの消極さ」「授業中の子どものもめごと」「水泳」「保健」「評定」の小項目に区分された。「指導計画」「授業前の準備」「評定」は授業の計画に関する心配であり、「子どもの訴え」「授業中の子どもの消極さ」「授業中の子どものもめごと」は授業を実施する時の心配である。また、学習指導要領に示された運動領域の中で「水泳」と「保健」の心配が多く見られ項目として設定された。

第2の大項目「行事」は5個と数は少なく、「スポーツテスト」「運動会」「集団行動」に分けられた。「運動会」は小学校教師のみ、「集団行動」は高校保健体育教師のみから回答があった。第3の大項目の「保護者からのクレーム」は1個あったが、心配していたクレームが実際に保護者からあったかどうかは確かめられなかった。「行事」と「保護者からのクレーム」は、身体運動を教材として実技を行う体育科特有の心配であり他の教科には見られない心配と思われる。

図1によれば、4、5、6、7月の体育の授業に関する心配の数は、それぞれ7、12、9、7個であり、5月が最も多く、次に6月、最後が4と7月の順である。また、4、5、6、7月の心配と答えた項目数はそれぞれ6、7、6、5項目あり5月が最も多い。学校に関する心配と同様^{注2)}、他の月に比べ5月がもっとも心配の数も種類も多い。ただし、水泳の心配が多く出てくるため、授業に関する心配事は数も項目数も6月が最も多くなっている。

表1 体育の授業に関する心配（具体例）

項目	具体例	頻度	
授業	指導計画	・雨の日の水泳を止めた時の授業を考えていなかった。 ・4クラスでバレーコート3コート。どのように授業をするか？理・文系もあり男女の比率もある。組分けをどうするか？ ・バトンパスのテストを行ったが、テストをしていない児童の活動の保障について。体育の時間なのにあまり動けなかった。	8
	授業前の準備	・用具や体育倉庫の使い方について調べていなかったため授業前にあわてた。	2
	子どもの訴え	・少々のごとで痛いと訴えてくる児童がとも多い。例えば、少し赤くなった、足をくじいた、こけて打った、など。	4
	授業中の子どもの消極さ	・マット運動でいろいろな練習の場を設けても、恥ずかしがってなかなか練習しない児童が数人いた（6年生）。	3
	授業中の子どものもめごと	・バスケットボールのゲーム中。審判に対するクレームが多すぎる。こと。（正しい判定にもクレームをつける）	2
	水泳	・水泳の時に時間内に終わらなかった。（着替えも含めて20分のオーバー） ・水泳でとにかく息つきがでずクロールができない児童がいる。 ・本日で水泳の授業が最後であったが一度も入らなかった児童が数名いた。（6年生）成績がつけられない！	5
	保健	・初めての保健の授業。シーンとした場所でかなり緊張。時間が2時限分あったのに、最初の20分ぐらいでやるところを終えた。残りの時間は読書にした。次の時間はユウウツ。 ・雨続きで保健が続き教室が騒がしかった。 ・H I Vについての学習（6年）であったが、「性行感染」の所で、ざわつきがあつて少々ふざけることが多かった。	4
	評定	・点票の出し方。具体的に態度何点実技何点等最初に決めていなかったの、点数のつけようがない。	2
行事	スポーツテスト	・スポーツテスト、準備するもの、スポーツテストの方法、どこで何をやるか等、体育館がないために（現在改修中：引用者注）、学年全クラス一斉に行う。（常に教師が何人もいる）場所は河川敷（外）、体育館3カ所に分かれて行う。 ・スポーツテストの実施に伴い体育の授業が進まない。	3
	運動会	・運動会全体練習の手順	1
	集団行動	・集団行動についてやったことがないのでわからなかった。学年全部一斉に動かすので（350人ぐらい）自分がやるとなったらどうしようかとハラハラした。	1
	保護者からのクレーム	・組体操指導中のケガについて、親からクレームが出てくるのではと思ったこと。	1

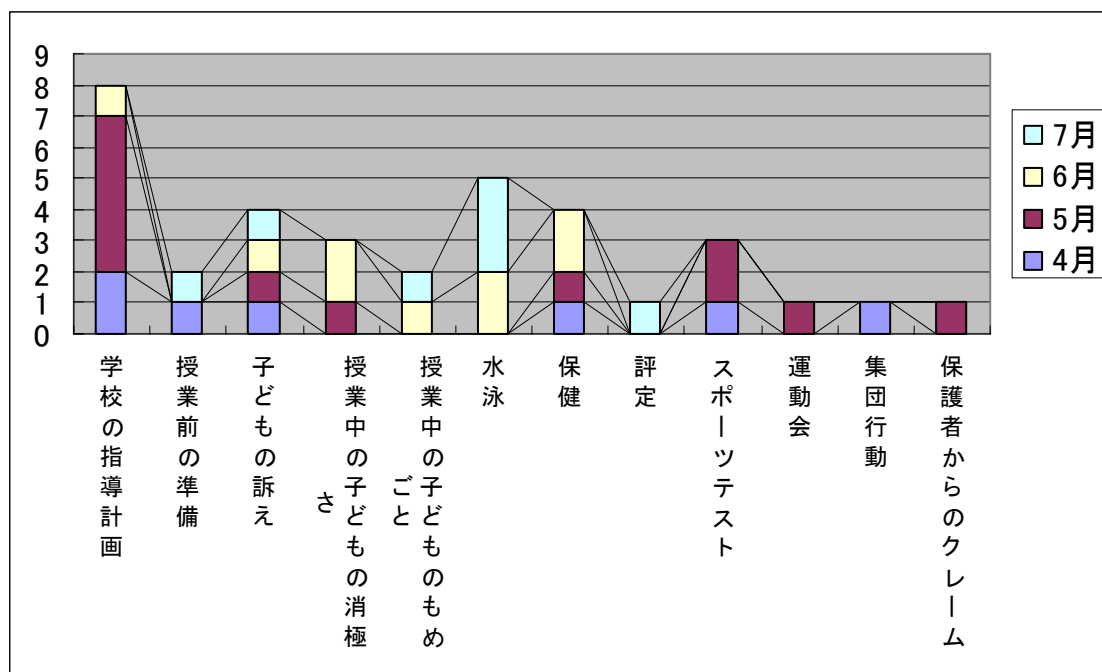


図1 体育の授業に関する心配（月別）

IV 考察

1. 「授業」の心配と初任者が必要としている援助

初任者が心配と感じ援助を必要としていることは教師のどのような成長の課題と考えられるのであろうか。吉崎静夫(1997)は、初任教師の「発達課題の3つの側面」として「①授業ルーチンの確立、②子どもの学習状態の読み、③授業設計力」があると指摘する。そして、「授業設計段階」で「②子どもの学習状態の読み」と「③授業設計力」が求められ、「授業実施段階」で「①授業ルーチンの確立」と「②子どもの学習状態の読み」が求められるとする。

「授業」に関して出された心配の表2の具体例を、吉崎静夫(1997)に従い「授業設計段階」と「授業実施段階」に分ける。「授業設計段階」の心配は、「指導計画」「授業前の準備」「評定」のすべての例と「水泳」の3つ目の例である。「授業実施段階」の心配は、「子どもの訴え」「授業中の子どもの消極さ」「授業中の子どものもめごと」「保健」のすべての例と「水泳」の残りの2つの例である。

第1に、「授業設計段階」の例から検討する。表4の小項目「指導計画」をみると、雨の日の実技が出来ない場合の指導案の準備や実技テスト時の順番待ちの子どもに何か課題を与える指導案の作成がある。この心配は、身体運動の実技を学習形態とする体育授業に特有の「授業設計力」が求められることを示している。「授業前の準備」にある体育用具の準備も体育科に求められる「授業設計力」である。

この他に、「水泳」の「本日で水泳の授業が最後であったが一度も入らなかった児童が数名いた(6年生)。成績がつけられない!」は、学習評価に関する心配である。学習の到達度がペーパーテストの点数で残らない実技学習の場合、どの時間に運動技能の到達度を測る実技観察を行うのか、またビデオ撮影や学習カードへの記入をいつ行うのかを単元計画に盛り込む必要がある。初任者の1学期に評価計画を含んだ単元を計画する「授業設計力」が課題となっている。特に2003年の新学期より「目標に準拠した評価」の実施が求められたため、単元の到達目標と方向目標に準拠して、「意欲・関心・態度」「思考・判断」「運動の技能」の各観点の評価基準を具体化した単元計画の作成が「授業設計力」として求められている。単元計画作成において評価資料の収集計画を記入し、形成的評価と総括的評価を実施するために最低限必要な知識と技能を教員養成段階で教えるとともに、初任者研修のプログラムの内容に具体化することが必要と思われる。

なお、この心配を書いたD君は理科と家庭科と体育の授業のみ6年生の専科担任でこのクラスを担当している。「生理やって言われました。そしたら、ほんとに何も言えなくて、『見学し』って」言うしかなかったと語ってくれたように、彼は高学年の女子が水泳の授業を、生理を理由に見学することを予想することができなかった。「授業設計段階」で「②子どもの学習状態の読み」ができるように、学級担任は初任者に対して、生理を理由に欠席する女子が存在することを伝える援助が必要である。学級担任にはあたりまえの情報でも初心者にとって「授業設計段階」で切実な意味を持つ情報は多いのである。

さらに「保健」にある「初めての保健の授業。シーンとした場所でかなり緊張。時間が2時限分あったのに、最初の20分ぐらいでやるところを終えた。残りの時間は読書にした。次の時間はユウウツ」という具体例は、調べる活動や発表、討論という子どもの学習活動を含んだ保健学習の単元計画をたてる「授業設計力」が初任者の課題であることを示

している。教室で教材を用いて学習する保健学習は、実技指導と異なる「授業設計力」を必要とする。「保健」を心配と記入したGさんは、「保健」の授業は、「もうシーンとしたところで、まず出欠をとってただけだ。みんなこっちを見ていて、誰もしゃべる人がいなくて。」という実技と異なる教室学習の雰囲気にとまどったという。1時間目は結局、教科書の説明を20分で終わってしまい残りの時間を読書にあてたのである。Gさんの高等学校時代の保健の授業は「テスト前にテスト勉強をさせてくれただけだった」こともあり、教員養成でも保健の授業の指導法を十分学習しないまま授業のイメージを持つことができなかつた。そこで、同僚教師の授業を観察し自作の教材を活用する楽しい授業を見ることができた。その結果、その後の保健の授業では教科書を説明するだけでなく、自作の教材や教科書を用いて生徒に活動させる授業を行うようになったという。この事実は、モデルの授業をみせる同僚の日常的な援助が「授業設計力」の向上に有効であることを示している。

第2に「授業実施段階」の心配の具体例を検討する。「子どもの訴え」と「授業中の子どものもめごと」に含まれる具体例は、「①授業ルーチンの確立」についての心配事である。「子どもの訴え」の「少々のごとで痛いと訴えてくる児童がとても多い。」は、「少し赤くなった、足をくじいた、こけて打った」時には、先生にいわなくてもしばらく運動を休んでいればいい等の授業の進め方を子どもと約束する必要がある。また「水泳」の「水泳の時に時間内に終わらなかった」という心配は、水泳の更衣やプールへの移動という実技に特有の行動を短時間で行う「授業ルーチン」を子ども達に確立することが課題であることを示している。

吉崎静夫(1997)は「授業ルーチンとは、授業がもつ認知的複雑さを軽減するために、教師と子どもとの間で約束され、定型化された一連の教室行動のことである。そして、この教室行動は、同じような授業状況において繰り返し出現する。」と定義している。確かに、体育の授業においても運動の仕方やコツを学習カードに記入したり発表したりする場面では、学習カードの配布や記入の仕方、筆記用具の置き場所など国語や算数と同じ授業ルーチンも存在する。しかし、体育の授業では体を動かす実技が中心になるため、上記の授業ルーチンに加えて「体育館や運動場での自由な行動が許されている生徒行動の複雑さを軽減するために、教師と子どもとの間で約束され、定型化された一連の体育館や運動場での行動のこと」と定義される授業ルーチンの確立が初任者の課題となる。

また、「授業実施段階」のもう一つの「発達課題」である「②子どもの学習状態の読み」に関する心配の具体例を検討する。例えば「授業中の子どもの消極さ」の「マット運動でいろいろな練習の場を設けても、恥ずかしがってなかなか練習しない児童が数人いた(6年生)」は、なかなか運動しようとしなない女子の学習状態を読み取ることの困難を示している。これを書いたD君はこの状態を次のように解釈したと語った。「特になんか女の子なんかからだが大きくなると、太ってっていうか、成熟っていうんですかね、してきたらやはり動くところ、胸が揺れてイヤとかいうのもあるんだろうけど、明らかにさぼってるんですね。それが伝わってくるんで、やはり自分としてもっとやって欲しいというのがあるんですけど。」6年生になれば、初任の男子教員の前で体を動かすことを恥ずかしく思う女子がいてもおかしくはない。その行動を「さぼり」と解釈しては、女子の行動を引き出すことはできないだろう。D君は子どもの日常的な行動を観察できない専科担当なので、学級担任がこれらの女子と対話し彼女たちの行動を前向きに解釈できるようにD君に援助する

ことが求められる。

2. 「行事」と「保護者からのクレーム」の心配と初任者が必要としている援助

「スポーツテスト」は、通常まだクラスが落ち着かない1学期の前半に実施を求められる。また、テスト項目が授業の内容と直接関連がないため、「スポーツテストの実施に伴い体育の授業が進まない」という心配が出されている。これを書いたEさんは「スポーツテストに追われて(5月は一引用者注)ほとんど授業ができませんでした。やるなら一気に、1日とか取ってやって欲しいと思いました」と述べ、体育の授業と別にスポーツテストを実施する計画を提案した。スポーツテストを行事として実施する指導計画作成が求められる。

また、「行事」の具体例に「運動会全体練習の手順」という心配があげられている。最近学校行事の多い秋を避けて春の5月から6月に運動会を実施する学校が増加している。ただし、5月は心配の総数が最も多くなるとともに心配項目の範囲も最も広くなり、授業や生徒指導、部活動という子どもの指導に加えて、職場になれる「職業的社会化」の事項、初任研や研究授業という学校の体制、家庭に関する心配など学校のすべての仕事にかかわって心配が吹き出してくる時期である。このような心配が吹き出してくる時期に、学校全体の行事である「運動会」が実施されることは、初任者にとってかなり大きな負担をかけることになっていると推察される。

「集団行動」は、高校保健体育教師のGさんのみの回答であった。Gさんの高校は校舎改築中のため、体育実技はすべて2時間続きで2人の教師が指導する合同体育であった。そのためGさんは4月の集団行動と5月のスポーツテストは「年配の人が、『次やりなさい』って言われたんですけど、『ちょっと勉強させてください』って言って」もう一人の教師の指導の仕方を観察することに努めた。その理由は、Gさんが「集団行動はほんとに全然やっていなかったの。」と述べるように、教員養成のプログラムに集団行動の指導が含まれていなかったため、排列指導等の集団行動の指導法が分からなかったからである。この場合のように、初任者が真似たり工夫したりするためのモデルとして同僚教師が自分の授業を初任者に見せる日常的な援助が求められる。

V まとめ

「授業設計段階」で体育の授業に関して初任者が必要とする援助は次の2点であった。第1に、雨天用の授業案の作成や実技テストの順番待ちの子どもに課題を与える授業案の作成、さらに評価資料の収集計画を組み入れた単元計画の作成、保健学習の単元計画の作成という「授業設計力」に関する知識を援助することが必要であった。

第2に、単元計画を立てるために高学年女子の第2次性徴に関する情報が必要なように、実技の単元計画に必要な「子どもの学習状態の読み」を初任者に伝える援助が必要だった。

「授業実施段階」で体育の授業に関して初任者が必要とする援助は次の2点であった。第1に、水泳の更衣やプールへの移動という実技に特有の授業行動を子どもに定着させる「授業ルーチン」の確立が初任者の課題であり、この確立への援助が必要であった。

第2に、人前で運動実施を恥かしがる高学年女子に特有の心理に関する知識は授業での女子の消極的な行動という「子どもの学習状態」の理解に必要である。初任者が授業での子どもの運動行動の意味を理解するために、このような子どもの発達の特徴の情報を知

らせる援助が必要であった。

学校全体の指導計画作成に関する初任者に必要な援助として、次の2点が示された。第1に、スポーツテストの実施を体育授業以外で実施する指導計画作成が求められることである。第2に、運動会の実施を1学期に行う場合、学校生活全般にわたり初任者の心配が吹き出てくる時期であるため初任者の負担を軽減することが求められる。

体育の授業に関する初任者への援助は、自作教材を用いる保健の授業や集団行動の仕方を同僚が初任者に観察させた例のように、初任者が真似たり工夫したりできるモデルを同僚が見せる日常的な学校での援助という方法が効果的であった。

注

注1) 本研究の一部は、2004年9月に信州大学で開催された日本体育学会第55回大会の一般研究発表で、木原成一郎、梅野圭史、松田恵示、日野克博「体育教師の実践的力量に関する研究①初任者研修段階で求められる実践的力量に関する事例研究」と題して口頭発表された。

注2) 本調査では、7名による質問紙の集計により「学校に関する心配」は、「学校内の子どもの指導」と「職場」と「家庭」の大項目に区分された。第1の「学校内の子どもの指導」は32個と最も心配の数が多く、これらはさらに「授業」「生徒指導」「部活動」の中項目に区分された。「授業」は合計13個と数多くあり、「授業での教え方」と「授業での子どもの様子」を含んでいる。「生徒指導」は「子どもの個人的問題」と「子どもの集団的問題」と「生徒指導」の小項目を含み、中項目の中で15個と最も数が多かった。「部活動」は高校教師Gのみの解答であり、高等学校保健体育教師の心配事項の特徴を示している。第2に、「職場」は合計11個あり、「学校運営」「同僚関係」「初任研」「研究授業」の中項目からなる。これらは、主に学校や同僚の一員となる「職業的社会的」の心配項目である。第3に、「家庭」は4個とそれほど数は多くなく、「保護者の問題」と「家庭の教育力」の中項目に分けられた。さらに、4,5,6,7月の学校に関する心配項目の合計数は、それぞれ13、16、11、10個であり、5月が最も多く、次に4と6月、最後が7月の順である。また、4、5、6、7月の心配と答えた項目数はそれぞれ6、7、6、4項目あり5月が項目数も最も多い結果となった。

文献

浅田匡(1998)「教えることの体験」浅田匡他編『成長する教師』金子書房。

Behets D. (1990), Concerns of Pre-service Physical Education Teachers, *Journal of Teaching in Physical Education*, 10, pp.66-75.

Hardy C. (1996) Trainees' Concerns, Experiences and Needs, in Mawer M. ed., (1996), *Mentoring in Physical Education*, the Falmer Press, pp.59-72.

川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論, pp65-114.

木原成一郎、磯崎尚子、磯崎哲夫(2003)「教育実習生の小学校体育科指導の心配に関する事例研究」『日本教科教育学会誌』第25巻, 第4号, pp. 29-38.

木原成一郎、松田泰定(2002)「教育実習生の体育科指導に関する調査研究」『学校教育実践学研究』第8巻, pp.1-8.

箕浦康子（1999）『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房。
ネルソン.T、片岡暁夫他訳（1999）『最新体育・スポーツ科学研究法』大修館書店，p.388。
鈴木淳子『調査的面接の方法』ナカニシヤ出版，2002年，pp.24-25。
吉崎静夫(1997)『デザイナーとしての教師、アクターとしての教師』金子書房。